



学校便り 琢磨

令和5年度 第30号 R6.3.19 三豊市立詫間小学校

栄光を讃える

おめでとうございます。敬称は略します。

【香川県教育委員会教育長表彰】3年 樽井 陸 (全国的な大会での優秀な成績)

※ 3/22 の修了式の前に表彰状を授与する予定です。

第136回卒業証書授与式

3月15日(金)。三豊市立詫間小学校令和5年度第136回卒業証書授与式が行われました。今年度、在校生は、5年生と4年生が式場に入りました。1～3年生は、リモートで卒業式に参加しました。また、5年ぶりに来賓の方々にもご案内し、当日は、25名ものご来賓の方々に出席いただき、90名の卒業をお祝いしていただきました。



卒業生の態度は立派でした。90名の卒業生一人一人が、自分の精一杯の返事をしてくれました。私が、6年生と卒業証書授与の練習をしたのは、たった1回きりでしたが、その時にちょっとだけお願いしたことが、完璧にできていました。

卒業生の歌は、感動的でした。心に響きました。もちろん「呼びかけ」の言葉も素晴らしかったのですが、歌に込められた一人一人の気持ちが伝わってくるようでした。



私は、本校の卒業生は日本一だと思います。私は、日本一幸せな校長だと胸を張って言い切れます。90名の皆様の輝く未来に幸多かれと、幸多かれと念じています。

5年生の皆さんは、本当によくがんばってくれました。卒業式の会場準備、校内の清掃、掲示など在校生のリーダーとして立派に役割を果たしてくれました。「卒業生をお祝いするんだ!」「私たちの手で、日本一の卒業式にするんだ!」という気持ちが伝わってきました。本当にありがとうございました。



4年生の皆さんの卒業式の態度は立派でした。卒業式で式辞を述べている時、4年生の皆さんの目や表情から、単に行儀良く座っているのではなく、真剣に私の話を受けとめ、卒業生との思い出を頭の中に巡らせている様子が伝わってきました。

1～3年生の皆さんには、会場の都合で、リモートでの参加となってしまいましたが、教室での態度はとても立派だったと担任から聞いています。見送りでは、大きな拍手や声かけをしてきていました。

100点満点の卒業式でした。日本一の卒業式だったと、誰が何と言おうと、私はそう思います。

1年間、ありがとうございました。

今回の学校便りが、本年度最終号となります。1年間、学校便りをお読みくださりありがとうございました。

教職員の人事異動の発表は、3月21日(木)13:00です。夕方には、本校の異動状況をメール等でお知らせする予定ですが、一部、異動が確定していない教職員もいますので予めご了承ください。

できなかったことは数えず できたことを数えなさい

私は、こう見えても、けっこう小さなことをくよくよと考え、気にしてしまう性格です。小・中学生の頃は、勉強も運動も友達関係も、自分の思ったように、いやそれ以上にできたもので、ポジティブ（積極的で前向きに考える）でいることができました。しかし、高校生や大学生の時代は、とてもネガティブ（物事を悪い方に考えてしまう）になってしまいました。学業の成績が思ったような結果にならないとか、あれだけ得意だった陸上競技も決勝に進むこともできない、後輩にまで抜かれてしまったとか、心を許せる友が一人もいないとか、進学・就職ができるのだろうか、将来、自分はどんなになってしまうのだろうか等と悩んでいたものです。その悩みすら、打ち明ける人は、周りには誰もいませんでした。勝ち気な性格もあり、自分の弱さをさらけ出すことができなかつたため、表面では明るく振る舞ってしまったから、私がそんな気持ちでいるとは、周りの誰も気付かなかつたと思います。それが、私の精一杯の「見栄」だったのでしょう。そうすると、大学の授業には行かない、部活（スピードスケート部）の練習も休むようになり、アパートで引きこもりがちになってきました。そんな生活をしていたので、大学2年生の秋頃、学務課から呼び出され「このままでは卒業できない。留年も覚悟してください。」と言われたのです。

そんなある日、私は新聞か何かで「悩み事相談ダイヤル」を見て、気が付いたら電話をしていました。そんなに期待して電話したわけではなく、電話先の知らない誰かになら何となく話すことができるかも知れないと思ったからです。今、考えれば、その電話をしたことが当時の唯一のポジティブな行動であり、その後の人生を大きく変える出来事となりました。

はっきりとは覚えていませんが、年配の女性の電話相談員だったと思います。時間をかけて当時の生活状況を聞いてくれました。私の考えや行動を一切否定せず、ただ聞いてくれたのです。ですから、私は、いつの間にか、初めて、自分の悩みを人に話すことができました。その相談員の方が、「一つ騙されたと思って試してみたら？うまくいかなかつたらまた、電話してくださいね。」と教えてくださったのが「できなかったことは、数えずに、できたことだけを数えてみなさい。」でした。半信半疑で、「分かりました。そうしてみます。ありがとうございます。」と暗い声で電話を切りました。

その後、ノートを一冊取り出して、できたことだけを書いていくようにしました。最初の1日目は、何も書くことがありませんでした。2日目の夜、「今日も何も書くことがない。」とノートを閉じようとした時に、あの相談員さんの言葉をふと思い出しました。「できたことって、ちょっとしたことでいいのよ。例えば、3食の食事をしたとかでもいいのよ。あなたが、昨日までできなかったことができたなら、それを書くのよ。」という言葉でした。その日のノートには、『授業に1時間出た。』とだけ記していました。きっと効果無いだらうと思って始めたことですが、やっていくうちに、書く内容が増えてきました。「〇〇君と、久しぶりに出かけた。心から笑った。」とか「授業に出て、最後まで訳の分からない講義を聴いた。」とか、「アルバイトで温泉ホテルに行って、宴会場で寝た。」とか「バスの添乗のアルバイトをしてお客さんにすごく感謝された。」とか、「2年間で47単位しか取れなかったのに今年は1年で55単位も取った！」とか。そのうち、できたことが増え過ぎたので、書くのがめんどくさくなり止めてしまいました。いつの間にか、私は、生き生きと生活するようになっていたのです。あれだけ後ろ向きに考え、やる気が無かつた自分がよみがえつたと意識できたのです。

あれから40年。「うまくいかなかつたらまた、電話してくださいね。」と言われていましたが、一度も電話をしたことがありません。あの時の相談員さんには、とても感謝しております。その感謝の気持ちを伝えることができませんので、今は、子どもたちにこの話をしているのです。

振り返ると、この弱さが、実は教員としての強みになったのかもしれない。何事もうまくいなくなり自暴自棄になった経験が、教員としてのプラスに働く経験に変わったのかもしれない。ですから、卒業式で私は、「楽しいことであれ、悲しく辛いことであれ、6年間の経験は、何一つ無駄なことはありません。」と卒業生に言い切つたのだと思います。そして、コロナ禍からずっと、終業式には「できたことを数え、それを支え応援してくれた人の顔を思い浮かべよう！」と子どもたちに話しているのだと思います。